

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：31106

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11841

研究課題名(和文) 個人別態度構造分析とカードゲームを融合させた統合失調症家族への新規支援法の提案

研究課題名(英文) Proposal for a new method to support families having schizophrenic patients by integrating the personal attitude construct analysis and a card game

研究代表者

川添 郁夫 (Kawazoe, Ikuo)

青森中央学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：80624741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：精神障がい者の治療は病院から地域へとシフトされ、多くの統合失調症者は家族のもとで生活し、家族によって生活支援と情緒的支援が行われている。しかし、家族は疾患に関する知識や対処能力が十分ではなく、対処能力に不足を感じながらも支援を続けている。そこで、疾患に関する知識を獲得し、不足している対処能力を高めるために、統合失調症者家族への支援方策として、知識の獲得と問題行動への対処方法を学びことのできるカードゲームを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題は、統合失調症者家族の困難の現状、ケアや問題行動への対処を明らかにするために、研究対象個人の心理と行動の理解を可能とする技法である個人別態度構造分析を採用したことにより、家族が直面する困難場面を特定し、家族がどのような意思決定のもとで対処行動を選択したのかについて、全貌を明らかにすることが可能となった。

家族の体験している困難への対処方法の引き出しを増やすための学習機会としてのカードゲームは、家族の疾患への理解度を深めるだけでなく、家族自身が振り返りの機会となり自己効力感の高まりが期待できる。

研究成果の概要(英文)：Previously, people with mental illnesses were treated by hospitals, but they are now treated by local communities, and many schizophrenic patients live with their family members, who give life and emotional support. However, the family members do not have sufficient knowledge on schizophasia or coping capacities, but they keep supporting patients despite feeling the lack of coping capabilities. In order for them to acquire knowledge about the illness and enhance their coping capabilities, the authors created a card game, through which the family members can acquire knowledge on mental illnesses and learn methods to handle the problematic behavior of schizophrenic patients.

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症 家族 カードゲーム

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 精神障がい者の治療は病院から地域へとシフトされ「障害者プラン ノーマライゼーション7か年戦略」のもと、社会復帰施設等の設置に関する数値目標が提示されたものの、目標は達成されておらず不足した状態が継続している。一方、地域で生活する精神障がい者の多くは家族のもとで暮らしており、家族が生活支援と情緒的支援において中心的な役割を担っている。家族は医療従事者からさえ十分な支援を受けておらず、知識や対処能力に不足を感じながらも支援を続けている現状がある。今後も家族がケア主体的役割を担わざるを得ず、地域に十分な社会資源が整備されない現状にあっては、家族の困難はますます増大すると予想される。従って、家族に対する適切な支援システムの開発が望まれる。しかし、家族が抱える困難や問題行動への対処の現状など、その全貌は明らかとなっていない。

(2) 精神症状に伴う困難場面に対処する際に、親としてどのように関わるべきかについて、共通理解された事柄は少なく、当事者との関わりの中で失敗を重ねながら学習を深めている現状がある。加えて、困難場面は当事者と親がおかれている環境や親のパーソナリティなどによって抱える負担は大きく異なる。しかし、困難場面への関わり方の体験を通して学んだ対処法は、環境が異なっていたとしても他の親にとっては有用となる知識や対処法がふくまれるはずである。しかし、現状では統合失調症の子どもを持つ親が支援する過程で獲得した知識や対処法は明らかにされていない。

(3) 精神症状に伴う困難場面について、医療者が常に正しい対処行動がとれるとは限らない。むしろ、当事者の特徴を理解した親が適切に対処できていることが多い。親が実施している対処行動の素晴らしさを認めつつ、親同士が経験談の開示をすることで、活発な意見交換の場となり、さらに対処行動の質を高め、新たな対処行動の獲得につながると期待される。しかし、現状では統合失調症に伴う困難場面への対処方法を学ぶツールは存在しない。

2. 研究の目的

(1) 精神障がい者を支援している親が直面する困難場面を特定し、どのような意思決定のもとで対処行動を選択しているのかについて全貌を明らかにする。

(2) 統合失調症に伴う困難場面への有効な対処方法を学ぶツールとしてカードゲームを作成する。

3. 研究の方法

(1) 統合失調症を持つ子どもを支援する親を研究対象者として、親の困難の現状、ケアや問題行動への対処法を明らかにすること、それを基に困難を抱えた家族への援助の在り方を見出すことを目的として、個人インタビュー調査による個人別態度構造分析（PAC分析：Personal Attitude Construct、以下PAC分析）を行った。PAC分析は、個人の心理と行動の理解を可能とする技法である。発生した困難場面に対して親が状況をどのように認知して対処行動を選択したのか、意思決定に至る一連の過程について調査した。具体的な教示は「あなたは、あなたのお子様統合失調症になったとき、どのように感じましたか」、「どのような場面や状況で困難を感じましたか」等を尋ね、関連する自由連想を回想させ、連想項目を重要順に並べ変えさせた後、連想項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。次いでウォード法によるクラスター分析を行い、各クラスターのイメージや併合理由、項目の土イメージへの解釈を語らせた。

(2) PAC分析結果に基づいて意思決定に悩む困難場面への対処に関するカードゲームを作成し家族グループで実施した。カードゲームの項目内容は日々の困難場面において意思決定に悩む場面であり、正解や不正解はなく、すべての判断や対処行動が正解ともいえる場面とした。「突然の暴力で大変なことがあった。息子はいなくなった方が良かった」、「症状が一番苦しんでいるのは本人だと思う」、「子どもの足りないものを考えるより、あるもの考える」などを記述したカードを読み上げ、自分ならどう判断するか考えてイエスまたはノーカードを選び、一斉に開示して、何故そのカードを選んだのかを、意思決定に至った理由について参加者に意見を述べ合ってもらった。

4. 研究成果

(1) 親が抱える困難場面には、日常生活においては症状が安定しないこと、当事者の暴力への悩み、親と子の関係性への悩み、安定して勤められないこと、引きこもり等の統合失調症者側の問題が抽出された。他、医療に対しては、医師との関係作り、退院を要求された時の対応、服薬継続等の問題や制度の問題など多岐にわたる困難を抱えていた。

(2) PAC分析による語りは、当事者の抱える病気の辛さなど、普段は意識しなかった事柄に気付くなど状況を客観視する機会となっていた。親が体験した困難場面を他者に語ることで状況を客観視して振り返ることとなり、困難場面への捉え方に新たな意味づけがされていた。症状に伴う問題行動に焦点が当てられていた家族も語りによる外在化によって、症状を理解する視点

がもたらされ、孤立していると感じていた親からは、現実には医療者に支えられている親の物語に変化していた。

親の困難場面に関する語りは、体験を外在化し、客観視して振り返る機会であった。従って、高EE家族や生きがい感の低い親への関わりにも語りは有効だと考えられた。

(3) PAC分析による語りによって親の自己洞察が深まるとともに、当事者の病状や特徴を理解する機会となり、当事者にどのような援助を提供することが必要なのかという考えに至っていた。PAC分析はクラスター分析によって示されたデンドログラムを眺めながら自らが各クラスターの意味を解釈する作業を行う。自己洞察しながらデンドログラムを解釈する作業から思いもよらなかった対象者自身の心の内面が気づかされる機会となり、親自身に対してフィードバック機能と類似した効果を与え、自己理解を促進する作用があるものと考えられた。

(4) 困難場面に関するカードゲームの体験を通して、親はそれまで明確にしていなかった自らの意識への気づきが促されていた。しかし、気づきの内容は、それぞれの親によって様なものではなく、親の体験により多様であった。気づきを得られる場面も親のおかれた状況に依存してそれぞれに気づきの内容に違いがあった。困難場面が共有された場合には、気づきに関する移り変わりのプロセスがみられた。始めに「視野が狭窄した状況認知」（問題行動をもつ当事者と私を支援しない配偶者）から、語りにより「客観的な視点の獲得」（本人なりに努力している当事者と不器用ながらも努力している配偶者）へと変化し、更に「現状への認知の変化」（私が現在も元気に生活できているのは、当事者の努力のおかげであり、配偶者の努力と私への支援と配慮のおかげ）と変化していた。

(5) 統合失調症を持つ子どもを支援する親の困難の体験は、一時的に挫折感を伴っていた。カードゲームにより、困難の体験が外在化され、体験と向き合う機会となり、「今は困難であっても、いつかは解決できる」と期待を持つことの大切さに気づいた。親として子どもと一緒に困難に向き合うことで、親自身が成長できること、当事者への支援は自分自身を磨くために必要なものであるということに気づき、困難に振り回されることなく援助を継続したいとの視点が得られていた。

(6) カードに記載された項目内容が、ある対象者にとって心理的抵抗が生ずることがあった。暴力的な場面に発言しないなど、カードゲームへの参加には十分な注意が必要であった。また、初見の親は見知らぬ親の前で思いを全て話すとは限らない。したがって、初見の親が自由に話せるためには、ゲーム開始前のアイスブレイクや研究者側の配慮が必要であると考えられた。具体的には、親の困難場面の内容に関わらず参加者全員が傾聴することや、どんな話でも否定しないこと、話さないことの自由を保障すること、研究者の立ち位置は参加者から教えていただく立場をとり、参加者と対立する立場とならないことが大切だと考えられた。

(7) カードゲームの項目内容は抽象化を高めたカードを用いて意思決定する方法と親が体験した一連の対処行動について意志決定する方法の2種類を準備した。抽象度を高めた項目「突然の暴力で大変なことがあった。息子はいなくなった方が良かった」という内容では、場面の理解や共有度に差が生じ、自分の家庭とは異なると感じた場合には関心が向かない傾向が高くなった。他方、カードの項目内容が「突然の暴力で大変なことがあった。息子はいなくなった方が良かった」とのカードに続いて、「症状が一番苦しんでいるのは本人だと思う」、更に「子どもの足りないものを考えるより、あるもの考える」のカードを提示し、困難場面の体験に沿って一連の出来事として意志決定する場合には、家族の置かれた状況の違によらず、家族が体験を想起しやすい傾向が強いと考えられた。

抽象化を高めた困難場面のカードを用いた場合、発症後間もない家族への教育効果が高いと考えられた。他方、家族の一連の出来事と対処行動について意志決定する方法では、経過の長い家族が自分の行動を振り返る機会とすることに優れていると推察された。

(8) カードゲームに対する意見には、「人の意見が聞けて良かった」、「その人の立場によって判断が違う」、「ゲーム内のことなので、反対意見を聞くことができる」、「ゲーム内のことなので、対立しても感情的にならないですむ」等がみられた。ゲーム形式であることによって、自分とは異なる対処方法であっても抵抗なく受け入れ、理解を深める機会になると考えられた。

(8) 親の一部に、PAC分析やカードゲームの参加に不向きな対象が存在すると考えられた。統合失調症とは関連のない内容には雄弁に語れるが、PAC分析において刺激文に対する自由連想の記述ができない親が少数存在した。発生した出来事を時系列に従って伝えることはできるものの、複数の出来事をまとまりのある語りを集約することや、自己の内面を振り返ることが難しい

親の場合は、デンドログラムの解釈が難しく、意味を考えることができなかった。この理由は、PAC 分析の方法やカードの内容を自分自身の体験に置き換えて考える機会が無かったことやストレスのために困難場面を想起できないこと、自分自身の内面を吐露することへの心理的な抵抗があることが考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川添郁夫、北宮千秋、山田基矢、多喜代健吾
2. 発表標題 カードゲームを用いた教育が若年者の自傷行為への理解に与える影響
3. 学会等名 第38回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川添郁夫
2. 発表標題 ディケアを利用する精神障害者のセルフスティグマと自己効力感
3. 学会等名 第37回 日本社会精神医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川添郁夫
2. 発表標題 統合失調症者の母親へのPAC分析 30年の疾病体験の振り返りから得られた困難への気づき
3. 学会等名 第36回 日本社会精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川添郁夫
2. 発表標題 統合失調症者の父親へのPAC分析 衝動的な暴力と迷惑行為に対処した振り返りからの気づき
3. 学会等名 第12回 日本統合失調症学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 則包和也、田中真、對馬恵、武尾照子、川添郁夫
2. 発表標題 放射線リスクコミュニケーションの効果的な教育のための教材開発
3. 学会等名 第6回 日本放射線看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 則包和也、武尾照子、對馬恵、田中真
2. 発表標題 放射線が関わる課題に架空の家族として決断するプロセスを提供する教材の効果検討
3. 学会等名 第7回 日本放射線看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	則包 和也 (Norikane Kazuya) (00342345)	弘前大学・保健学研究科・准教授 (11101)	